

光明会の歴史と将来への展望□東西学道会総会にて

杉田善孝上人談(昭和59年3月号『光明』誌 一部加筆改変)

仏教の歴史は、教祖の中心真髓(宗)となる法を絶やさないように、初めのうちは唯受一人の瀉瓶相承として伝えられ(伝法)、一面利益衆生のため広く伝道されてきました(布教)。しかし、教団の発展により唯授一人では間に合わず集団伝法する必要上、法の体系化が行われてきたのでありますが、智解に偏して宗を喪った煩瑣(はんさ)主義に陥り枝葉末節に流され、現在、宗門は生命枯渇し形骸化しているという状態であります。

光明会においても直線道の担い手が漸次世代交代しますが、正しく伝法をうけるためには話を理解しただけではだめで、三昧実践態裡でないといけない。智解と修行、即ち解行具足しないといけない。「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」と申しますが、導き手の方は、よくお念仏して霊的な方面のお育てを頂き、また肉の心による教義(光明主義のみ教え)を読んで、霊性の上からと肉の心の上からと、それを自分のものとして分相応に身につけていくことが非常に大切であります。話し手も聞き手も三昧が欠落してしまったような光明会になってしまったら終りであります。三昧精進が中心で名体不離だから、弁栄聖者の入山学道、道元禅師の参学(参禅学道の略)よりとって、青年会を学道会と名づけた訳であります。光明会は寓集で、浄土宗に借り住いをしている念仏宗ですが、所帰(本尊)、所求(目的)、去行(修行法)(:安心)は独自のものを堅持しているという点で、浄土宗の念仏講のひとつではないわけです。

「天才ことを始める、秀才これを纏める、鈍才これを相続する」と言いますが、光明会にも秀才が出てきていつかは大系化なさるでしょう。歴史は繰り返すと申しますが、伝法は一つのシンボルで表し前述のように体系化するときの当事者は大切なるところを体系化の中心に置きますが、得てして智解に偏した学者が多いので、枝葉末節に流され、光明会としては大切な魂が漏れ落ち「仏造って魂入れず」ということがないように、前者の轍を踏み厳重な注意が必要であります。そのためには良くお念仏して霊性面でのお育てを頂かなければなりません。

聖者の伝道形式に真実説(随自意説)一厳密な伝法、「広義の見仏」を目的とする理感二性を統一総合した直線道のみ教え一と方便説(随他意説)一「狭義の見仏」を目的として結縁を主とする感性主義的直線道を含めた応病与薬のみ教え一の二つがありますが、後者は、時、場所、人によって異なるから一つに体系化することはできません。それで、前者の一番大切な魂を体系化の中心に置き、然らざるものと明瞭に区別していくようにします。

「光明主義は檀家制度でなく、生きた人を対象とした教会主義でいく」と聖者は仰言った。そのためには因縁に任せた拈散主義に堕しないよう、教義信条を確実に身につけて三昧精進し、涅槃と菩提の理想実現に向って目的意識を明確にして、一生懸命に努力することが実に大切なのであります。そこを聖者は「如来光明中の努力主義」と仰言いました。「初心忘るるべからず」です。人間は歴史の実存、社会的生活をするものであり、かかる四次元的空

間に意志の自由を以て自己を表現する動物でありますから、単に漠然と煩惱と業の束縛のままに、つまり消極的に業因縁のままに流されていくと、個人的には、肉欲、我欲を満足させるために主我幸福主義が自己目的化して、徒らに自己とその子孫の繁栄を願うその実現のための方便と念仏を化して行く。これでは、いつとはなしに世間事に埋没した小市民的レベルに墮落、安住し、大乘菩薩の行願は雲散霧消し三悪道の業を作って輪廻してしまいます。

一方、光明会も娑婆の世界に存在しますから、努力しませんと汚れ、墮落します。会としても正しい信念が会員に浸透せず風化していきます。弁榮聖者は「消極的・退隱的・退嬰的であることは嫌いで積極的・進取的でないとならない」と。たとえ解行精進していても小智小行に慢をおこせば、急転直下修羅道に転落してしまうので、私共、自戒自制して高あがりしないようお互いに注意、啓発し合っていくことが必要であります。

お釈迦様も「身心ともに揺がずに/行にも住にも亦臥にも/此の念に居る仏弟子は/次第に上へ進むなり/次第に上へ進み来て/死王に見えずなりなるぞ」と仰言っています。

よく似た説があると真相を見抜くことが出来ず、認識し間違いをして道を誤ることがありますので、光明会趣意書に反することなどがあっても、それを意識せず無自覚に右に倣いすることがないように相互に注意・啓発し合い、ともに向上の一路を辿りたいものです。

直線道とそれならざるものがあるから直線道が盛んになる。反対のものがなければ直線道は長く続かない。反対のものがあるが故に直線道の根が他者の刺激と圧力を受けて、白根細根が寒中麦踏みで鍛えられるように太くなっていくのであります。

因縁任せというのではなく目的に向かって努力していくことが大切です。外部からの悪い宗教的信念、思想などを不断に受けるのが娑婆であり、それが支配的潮流です。その流れに押し流されてしまっただけではどうすることも出来ません。滔々と流れる五濁悪世の濁流に巻き込まれずに自行化他するためには、それだけの力量を得なければなりません。溺れている人を助けるのに濁流に押し流されてしまっただけではどうすることもできない。濁流に巻き込まれずに抜き手を切って救い上げるという力が必要であります。「天つ魔羅が吹きおこす百のいかづちむら雲も、青天さやかに照りわたる、月には障りあらざりし」とこうあるべきであります。劫濁（こうじょく）、見濁（けんじょく）、煩惱濁、衆生濁、命濁（みょうじょく）、かかる五濁悪世の濁流滔々として世の中は流れる。直線道でない所の教えはそうであるが、直線道は別ということはなく、私どもの胸の中にそういう業・煩惱があるので、自戒自制し高上りせず、常に三昧精進を怠らず、大切な光明主義の魂とする教えを理論的に把握する努力が必要です。

入りては三昧精進、出でては社会的活動を行う。自分の職業も食べるためと終らずに“仰せのつとめ”として“成仏の道”と化していきます。“お念仏”と“生活”との間に初めは矛盾を感じますが、如来様から三昧のお育てを蒙る分相応に、手段は手段でありながら目的は目的でありながら、統一調和されて大乘仏教における活社会的活動ができてくる。現実生活の荒波にもまれて困っている時は『無量光寿』の「世界観二面」（*）を拝読し、それに指導を得ていくようにと笹本上人様が仰せられました。

「身心土不二」の「心」の視点より大宇宙を見れば一切は唯心でありますから、信念が絶対界に突き抜けたら、現実生活より念仏を、曲線道より直線道を我が信念とすることは具合悪いから止めておこうなどという内外ともこの圧力に負けることはないはずであります。『人生の起趣』に「大菩提心発らずば一切の行為は悉く宇宙の目的に対して何の功もなき徒勞とならん」とありますが安心、信念があつて初めて「行」が徹底します。だから、百尺竿頭に一步を進めて、お念仏によって如来様のお力を蒙って非常にスケールの大きな信念を持つことが大切であり、度我的には、肉の生活を徹底的に浄化して頂きたいと苦心して本格的に取り組んでいくことによって、肉体を受けるといふことあらしめる業・煩惱を除却して頂けるのであります。

笹本上人は次のように仰言っておられます。

「自他ともに最尊の道により成仏し共に普遍的安寧を得たいという信念が、一日のうちに起こる八億四千の一枚(ひとひら)一枚の念の中核を貫いていなくてはならない」と。常に自己反省し叱咤激励して、人には寛容、自らには厳格に自己完成に努めていく。因果応報と救済の輪理を個と集団の上に正しく認識し、自分さえ救われたらそれでいい、一切衆生はどうでもいいという個人解脱では声聞縁覚、個人主義の仏教(小乗仏教)で、聖者は「心霊界の中有だ」と言っています。

個の自覚がそのまま全体社会によき刺激を与えて自他の連帯と結合を深める。個の目覚めが万人の目覚め、個の完成が万人の完成になる。地域社会集団(地方光明会)の目覚めが全国光明会の目覚めとなり、全国全部の目覚めが、また個ならびに地域社会の目覚めと相互に影響し合い、正しい調和統一がなされていく。古来から言われる「成仏国土成就衆生」もこのような観点より見ていきます。世界宗教への発展は個の自覚を他にしてはならないわけであり、個の自覚を失わないままに個と全体との正しき統一・総合をはかる(大乘仏教)。「有漏の善業は人天の果報を引く、生死解脱のためには無漏の悟りが必要である」と言われますが、始めから散乱心による社会福祉事業(人天の有漏業)などに重きを置いて三昧修行を二の次として「三昧証入」が無視・軽視されると、人天教、世間教と事実上化してしまう。そうなれば大乘仏教とは無縁となり、もう仏法ではありません。

内面を培う事の大切さを忘れ、外側で既成の事物に対抗しようとする、物理的な力が必要となり、それに浮き身をやつすと内部が空虚になり荒れ果てます。したがって、まず自己の内面の霊的充電が必要であり、内面が外面に溢れ出てきて人々を化他していく。そこに個人エゴ、地域エゴに陥らず、大乘菩薩の行願をもって、the relationship of an individual to the whole(個と全との関係)を、一者埋没するに非ず、二者分裂するに非ず、相互浸透し乍ら二者を正しく調和と統一にもち来らす連帯の和をつくり上げ、全国統一運動を実現していきます。入りては自己の心の中に霊的電気を充電し、出でては人々にこの電気を感じて、これを伝える。

光明主義の伝道師の資格(二条件)は、①仏性の卵が孵化して如来様の光明に触れるか、光明獲得していること、②弁榮聖者の真精神(純粹光明主義)をもって大体まがりなりにも

ざっと誤りなしに『礼拝儀』なり『歎徳章』が説けること、それが自分に理解でき、同時に人にも伝えられることで、それが身に付くと、その精神を日常のいろいろな事柄に応用することができるわけです。光明主義の教えは涅槃と菩提を成就することであり、それが純粹の目的です。そうであるがゆえに、世事百般のことにそれを適用することができる、そういう力量を如来様から頂き、これを自分の「仰せのつとめ」と課して、その上にそれを活かすということが大切であります。

最後に、個人、地域光明会、全国光明会の各々の活動上必要な四条件を挙げますが、各地区道場の連帯において大切なことは全国的観点の上に立つことを前提条件として、以下の四項目を守り具体的に努力していくことであります。

- (一) 差し繰ってお念仏の会に出席する。
- (二) 会費を喜んで積極的に払う。
- (三) 三昧精進(慧眼、法眼、仏眼)と研修会(肉眼)の両方面具足する様に精進努力する。
- (四) 機関誌「光明」の内容を充実させ一般の人にわかり易くしながら、しかも中心を失わないうで全ての人の羅針盤となり、光明会の全国的活動の動脈となるようにする。また会員数の増加より会員および会の質的水準の向上に努める。

* (参考)

世界観二面 (『無量光寿』 p 116-119)

世界と人生とに対する観念に二種あり。甲は世界は全く真に背き妄に従う無明罪惡生死、衆生の所感なる世界の故に人生と共に神に対せばその性反対なる質なれば全然厭忌(えんき)して侘に真に順う方面を求めんにはと世界と人生とは之を、厭離して淨き方面を欣うべきものとす。

乙は謂へらく世界及び人生はもと神の物にしてまた神の子として人生は尚進んで高等なる神の世界に昇進すべき階級とし準備として必ず履ざるべからざるもの、世界はその教場なり。人生は神の国に入らんとする予備科の学校なり。教祖及び宗教家は教師なり。種々の災厄苦難は是策励の鞭なり。人生快樂を目的とする如きは非なり。また厭世者の如きは愚痴漢なり。

神より賦せられたる本性を全力を竭して發揮しまた靈化し煩悶を化して菩提とし生死即涅槃と悟る。人生八十年即義務教育の時日なり。焉んぞ千万年を要するあらん。世界の万物の装置は悉く己を磨くの機、悪人の罵詈誹謗も打撻も心を鍛錬するもの、何ぞ之を避けんとする。己を全うせんが為に寧ろ甘受すべきなり。

一日は淨土に於いての百歳に勝れたり勇猛精進に修して唐損するに忍びず。

此予備の課業を卒るの時は必ず目的の高等なる如来自性の靈界に到達す。然り而して此主義は精神主義なれば自然界と靈界とは其途に必ずしも十万里を隔てず。淨土と穢土とは本来同一の弥陀身心内の両方面なれば、衆生の精神に感覺と直感との二面に於いて、感覺は自然界を直感は靈界と接せり。然らば死して後始めて極樂たるにあるず一面に是紛々擾々(じょうじょう)たる爛漫たる五濁の中に奮行し、炎黒燻たる精神をば觀念裡に常寂光の靈界に逍遙して八功德水に神を浴す。世は益生存競争激しきに進むに速度急なり然れば即ち一方に精神を逍遙せしむる神秘の靈界を発見して之に依て優々と靈を養うにあらざればとても勝利は望むべからず。

自然と靈界とは同一の弥陀身内にして、一方は修行奮闘の方面、一方は精神休養の爲め、而していよいよ卒るの日は永遠に神と共に楽しみ理想の靈界は全く実現す。

事に触れ縁に対して苦悶しまた悲觀を懐く如きは修業未熟の致す處、寧ろ愧づべきなり。益奮発励行せば既に純熟する時は日日の業務いかなる事に対しても敢えて畏るゝなくまた憂なく不足なきにいたる。よく努めよ。